

一荷堂半水による大坂俄種本翻刻①『二〇カの種類』

井上歩果*・寺坂愛生*

野田ひな*・藤井萌恵*・山口響史*

抄録 本稿では、大阪大谷大学教育学部における授業（崩し字学習）の成果として、一荷堂半水による大坂俄の種本『二〇カの種類』の翻刻を報告した。また、翻刻に際して使用した AI くずし字認識アプリ「み」が有効に使用できること、短話で構成されており解釈もしやすいことから、大坂俄資料が崩し字学習の初学者に適した教材であることを示した。

キーワード 近世後期上方語、大坂俄、一荷堂半水、崩し字学習、二〇カの種類

1. はじめに

18世紀半ば以降、日本における文化の中心は、上方から江戸に移る。日本語史の資料もそれに伴って上方語資料が乏しくなっていく。本稿では、資料の乏しさについて夙に指摘のある近世後期上方語資料として、一荷堂半水による俄（「座敷や街頭などで行なわれた即興的で滑稽な寸劇。享保年間（一七一六～三六）、大坂住吉神社の夏祭の行列で、素人が行なった即興の寸劇を起源とするという。」（『日本国語大辞典 第二版』小学館））の種本資料の翻刻を報告する。

なお、本稿における取り組みは、大阪大谷大学の講義「学校教育特論（言語）」の中で行われたものであり、学生による成果の一部である。このことをふまえ、崩し字翻刻の教材としての検討も行う。

2. 一荷堂半水『二〇カの種類』について

本稿で翻刻した『二〇カの種類』の著者、一荷堂半水については、武藤（1992）が詳しい¹⁾。武藤によれば、下記の通りの人物であるとされる。

本名は狭川（佐川とも書く由）峯二。文政十一年一月、大阪船場伏見町五丁目（三休橋筋）の糸物商に生まれた。（中略）作品では、浪華房菴恋々山人、逸佳堂淫人、房菴白水などの隠号で『春情色之姿見』以下の「読和もの」を書き、また半水の戯号では『人情穴探意の内外』や『諺臍の宿替』などの「滑稽もの」や、『新作落し噺』などの「落語もの」

があるが、なかでも『粹の懐』や『大つゑぶし』に代表される「俗謡もの」が好評であった。

上記の作品の中でも、「滑稽もの」は近世後期上方語資料として量、質ともに貴重なものであり、日本語史研究に活用されることが多い。日本語史研究における大坂俄資料の活用は未だ少ないが、まずは、既に滑稽本作者として資料の活用が多い一荷堂半水の著作を扱う。

『二〇カの種類』（西尾市岩瀬文庫蔵）は、安政6年（1859年）の半水自序がみえる俄の種本である。本文は十八丁あり、半丁毎に1つのネタがみえる。荻田・宮田（1990）によれば「この時期の本としてはごく標準的なもので、特に目新しいものはない。登場人物はすべて一人であり、特に凝った衣装や道具は使用しないことから、素人が手軽に余興として俄を演じる際の種本としての利用を、かなり意識したものとなっている」とされる²⁾。このことから、近世後期上方語の口頭語資料としての価値は高いものと考えられるが、資料性の検討については今後の課題としたい。

3. 翻刻凡例

翻刻に際しては下記の方針で行なった。

- ① 漢字は基本的に常用漢字に直した。
- ② ルビ、濁点、句読点は本文に則して施した。印刷不鮮明などでみえなかった部分そのまま表記している。
- ③ 割注の部分は〈 〉で括弧して示す。
- ④ 本文の右側に小書きされる音の類似を利用した言葉掛けの箇所は、該当箇所の直後に（ ）で括弧して示す。

*大阪大谷大学教育学部

⑤ 虫食い、破損、印刷不鮮明などで判読できなかった場合、字数が分かる場合は字数分□で示し、字数が分からない場合は〔 〕で示す。

※ 本文中には、人権に関わる語彙が用いられているが、日本語学の資料としての用途を重視し、本文のままに翻刻している。

4. 翻刻

(1オ) ○土用まへ 〈着ながしにてのうれんもつて出て〉

「さいぜんからわしに二〇かせい〜といふてこんなものをもたされたがよう見いやコラのうれんじやハエうゑの方にハ竹とをすところがあり下のほうにハすぞかあるそこで此ごろうりにくる物しやコリヤのうれんのすそ(両めんのしそ)といふのじや

(1ウ) ○見かへり 〈さむらいの思入にてかんばんであたまうち)

「アいた〜〜〜コリヤ身どもを何のうらミでちようちやくいたすなにゆへにあたまを(ボケ)ア、なんじや人かとおもふたりやコリヤかんばんじやイヤ何ていしゆたとへかんばんにもせよ武士のあたまをうたすからハモフりけんがならぬゾ かんばん(かんべん)がならぬぞヨ

(2オ) ○面壁 〈もふせんをからだにまきてほこりたゝきをほるその思入にて酒だるをもつて出て〉

「こんなものをもたしておいておまへは愚知な人じやよつて是をもつてちつとさとりをひらいたがよいといふがなんのこじやさつぱりわからんがア、コリヤきこへただるま大師じやのうて 樽の大酒(たるまだいし)といふのじや

(2ウ) ○地藏尊 〈ついふねの三ぶのこしらへにててつきうをもつて出て〉

「おれもつりふねの三ぶといふて夏祭にハずいぶん気のきいたおやじじやがまた一寸徳兵衛の女房はこのてつきうをうつくしいほべたへ当よつたがとかく男立といふものハちがふたものじや女房までがかほやくじやハへ

(3オ) ○網代 〈上品なる拵にて茶せきすミとりをもつて出て〉

「冬ハ茶の湯するハ炉のそばにいるゆへさむいことをしらんがなんほ好な御茶でハ夏ハとんとこまるじやそこで友人がいふにはとかく暑けのいらぬやうにこれで腹当てといわれたがこんなもので腹あてがでけるものかア、わかつた 炭とり(すミどり)の腹当てといふのかしらん

(3ウ) ○水湖 〈このミのなりにて下駄かたしさげて出

て)

「ハア、近江八けいといふ物は日本一の風景じやハへいま石やまからあわづの松ばらをつゝと通つたらついでに三井寺とそれから日がくれて夜る雨に合ふて此とふり片一ぼうはだしになつてきた所がかたあし(カラサキ)かとおもふたら下駄のかた足(せたのからはし)じや
(4オ) ○加賀見山 〈うバのなりにてぞうりもつて出て〉

「モシ〜ほんさんあんだのようにむつかるものじやござりませんサア〜いまむい〜とつてがん〜さんへ参りませうチャトそのかわ(か)をはき(なき)やんで花□(はなを)かふきなされソレ〜はやうぞうりく(じよりく) あそばせや

(4ウ) ○中ざり 〈つねのなかにて引ざり一そくもつて出て〉

「ア、こりやよいはきものじやゑらいすゐなはきものじやわしがこれをかうていた時にあちらからもそれくれこちらからもそれをくれと何かなしにわしが買ふてある物をぐるりから引ざりひつぱりトやあつた

(5オ) ○東寺 〈いきななりにて)

「ハ、ンこのつなぬきハわたなべからうりにきたのかしらんどうりで鬼手の直うちじやそんならこれがわたなべのつなぬきかしらん 東寺(ちようじ)そんなこといふて羅生門(らつちも)ない二〇カしたのじや

(5ウ) ○水無月 〈いさみのしやほんだまうりにてどぴんと茶わんをもつて出て)

「けふほどふいふもんかしらんが代呂ものハちよつともうれんがほうぼでさけばかりよばれて飯くわんもんじやよつて腹ハへるしのどハかハくし茶ばかりのんでいるのじやそこで 茶のんだ(しやほんたま)ナア〜すきはら(ふきだま)でござい

(6オ) ○秋の夕部 〈ゆかたがけてさげ重もつて出て)

「ヨウ〜この中ハなんじや玉子のまきやきに鯉のしほやきゑらいおごりじやナアコリヤ大ぶんあるわゐアリヤサ。コリヤサ。サ、と酒がないのじやコリヤすゝめおどりじやのふて 重結おごり(すゝめおどり)といふのじや

(6ウ) ○うどんげ 〈かたきうちのなりにて醤油のかた口をもつてでる)

「ヤア先年我父を討て立のく湯浅辛いもんよもや見わすれいたすまいかくいふ某ハばん紅竜野から治郎きき升なりサア〜〜〜ぢんぢように醤油〜(しようぶ〜)アコリヤあた口(かたきうち)をしたのじや

(7オ) ○山の神 〈内義の姿にて傘と提灯持もつて出て)

「モシうちかたへ手まへのハきていてじゃござり升ぬか
モフとつとわるいくせで朝でたらばん迄もどつてじゃご
ざりませぬいつでも内うちにいることはすくのうて

日笠ひがさ（ひがな）一日いちにち出でふしでござり升る
（7ウ）○いろは 〈子どものなりにて手だらひもつてで
る〉

「なんじやわしのかほも手もまつくろになつてあるとい
ふてミなわらふてじゃけれどわしやいままでおとなしふ
してよそ目もせずめに手だらひ（てならい）仕つかっていたのじ
や

（8オ）○十日 戒とをかまひす 〈このミのなりにてつちをさげて
で、〉

「なんじやこのばん匠じよづちでニ〇カせんとなぐるあちら
へいてもそんなこといわれこちらへいてもそんなことい
われどづちたをすた、きたをすとコリヤ人をなぐるもん
（なぶりもん）にするのか

（8ウ）○愛盛りあゐごか 〈通人のなりにてからかさとてうちん
をもつて空を見て出て〉

「ハ、ア又またそらがたいぶんくもつてきたさいぜんもいた
さきで道みちがくらいよつてもつていねといわれてこんなあ
かいてうちんをかつてきた丸まるでこどもミたようなそこで
コリヤてうちん〜（ちよち〜）あかい（あばゞ）
〜くもりうてん〜（つむりてん〜）といふのじや
（9オ）○三番さんばんそう 叟そう 〈好ミのなりにてミきどくり持もて出
る〉

「なんじやしらんとおもふたらコリヤ神酒かみさけとつくりじや
ナアなんじやちりん〜なるわひ瀬せと物のみきどくりで
もがら〜となるよつてやつぱりこれもすゞ（錫）のか
ハリじやある

（9ウ）○功こうの者もの 〈着きながしてこうこもつてやる〉

「どだあわたしハぶきやうなものじやよつてなんにもよう
せぬといふているのに何なにかなしにニ〇カせい〜と人を
〔 〕しにかけてぬかミそをつけさそとおもふてじやナ
アしかないかいはおそきこう（這う）〜らかでおこう
こ（おこう）□

（10オ）○残念ざんねん 〈好ミのなりにてこ、ろのせくま、野
梅をもつて出る〉

「こんな手がミをおこしくさつてぼん〜いふてくるよ
つてほんまにうまいかとおもふたらこの焚ほんめハくさつ
てあるこんなものをおれにくわしてどふなるもんで
一寸ちよつとよんでこいなんじや内うちにinkaまいやつナアちや
つとにんめ（にげ）くさつたナ

（10ウ）○福ふくもと 〈女のなりにてすのじをたけのかハ
にのせて出て〉

「ア、とかくうきよハマ、にならぬものじやとらい千里

のやぶさへこすにすもじ（ゆもじ）ひとへがま、ならぬ
わへ

（11オ）○建たてまへ 〈八まきにきおひのなりにてすいく
わをもつて出て〉

「ハア、このすいくわハ市岡いちおか新田しんでんじやよつほどよふてつ
てあるこんなすいくわをころりと喰くたらからだちうがす
いくわいろになつて赤あかふなるじやあろうコリヤしんでん
ずいくわ かほ（かハ）まるでまつかいといふのじや

（11ウ）○西王母せいおうぼ 〈ひやく性のこしらへにても、をか
たげる〉

「ハアも、やも、よいも、といふてうりあるあるいているを
ミな人がア、桃ももやハゑろうなまりよるといふて笑わらわれ
るがなまるはづじやわしやいなだ桃（いなかも）じ
やがな

（12オ）○輪棒りんぼう 〈弁べんけいのこしらへにて冷ひやしもの鉢べんに
なしをいれてもつて出る〉

「ハテこりや長刀ながなたかとおもふたらなしなたじやとハわる
い口合くちあひじや五条ごじやうのはしより御ごようの鉢はちにいれて出だしたら
それがほんまの冷ひやし物もの（むさしぼう）弁べんけいじや

（12ウ）○猿さるが鳴な鳴な 〈このミのなりにてはさミもつて出
る〉

「ア、いたはさミで手てをはさんだハエようゆびがきれな
んだことじやア、いたアいた、、、、どふしたんじや
一度いちどならず二にと造まコリヤはさミ（わがみ）つめつて二に度
（ひと）のいたさをしれといふのじや

（13オ）○紅梅こうばい 〈そのま、のなりにて雨戸あまをもつ）

「ハ、ンこりやうらのあま戸あまじやナアどうらく仕したの
かどつとそこらちうがとろだらけじや〇としこしになる
といふてくるのハこのことじやどうらくや〜（ほうら
くや〜）あまど（やまと）どうらく（ほうらく）

（13ウ）○日用にちよう 〈着きながしにてまきがミもつて出て〉

「仁田にったの四郎しろうは猪いののし、にのつてどゑらい手てがらを仕した
ときるたがあれハたしかふじのまきがおじやこれハまた
うちのまきがミじやあつた

（14オ）○高嶋たかしま 〈あるじのなりにてすゞり石いしをもつて
で、〉

なんじやわしにニ〇カをせいと石いし（いし）にか、つて
ひふているがいつまでさすのじやしらんモウあんまりし
やべらしたのでとうどすゞり（つゞき）つんぽにさすが
なア

（14ウ）○かハご 〈このミのなりにてはりほてもつて
でる〉

「この本ほんのはじめからたんとニ〇カをこしらへてきたが
そのなりでもいまこのにわかかいちだんぼて（ミテ）つ
いてあるのじや

(15 オ) ○子祭 (いきなるなりにてふるしきもつて出て)

「このふるしきハむつかしいハエひんのつ、みに恋の哥といふことがあるがそんならうたへ仕たこといふて、味噌をつけたらどむならんわしのようナ大こんがミそをつけたらふるふきでハのうてゑらい風呂しき (ふるふき) じゃ

(15 ウ) ○放生会 (とりやのなりにて大きなすゝりをもつてでる)

「このすゝりハいつあつらへかして巾かひろうござり升るこれですミがゑろうすりよいそこですゝりや (すゝめや) はば (はなし) ひろい (とり) とハどふじや

(16 オ) ○弓帳 (しょうぶつけやのゑ入にてはちまきしながら出て)

「ハ、ندوق仕たんじやおれのあたまがわるいのか手拭がいかなのか鉢まきするといつでもゑのほうへぬけるなんで此様に常事ぬけるのじやしらんコリやはちまき (かちまけ) のじようじぬけ (しょうぶつけ) じゃ

(16 ウ) ○海原 (すゝはきのこしらへにてたゝミをもつて出る)

「モシこのたゝミあなたがたいりませんかこんにやくじやござりませんぜよつぽどよいのじや今のうちにもろておきなさんとまたあとでほこり (のこり) おゝいことがござい升ぞへ

(17 オ) ○猿智恵 (いそがしきおもい入にて屏風をもつて出る)

さいぜんからこんなものもつてあるにひろげてもつとゑろう工合がわるいコリヤやつぱりこふたゝんでもつのがいつち屏風 (ぢようぶ) なわへ

(17 ウ) ○ひさご (このミのなりにてぢよたんをもつてでゝ)

「ア、これだれじやぢよたんのひきだしへ胡麻をいれておいたのじやこれ見いなこのとふりこぼれたがなエ、いまへしいコリヤぢよたん (ぢようたん) からごま (ひま) が出たのじや

(18 オ) ○写絵 (おなごのこしらへにてきやうだいとかゞミをもつて出て)

「わたしやこの鏡だいかゞみはお家さんにもらいたんじやそこでうだいじやない鏡台 (てうだい) じやそ□□ひとがミなかゞミ (わがミ) は仕合せしやといゝ升

(18 ウ) ○友白髪 (袴羽織にて島台持出て)

イヤモフとかく島台は□目出たいものハないつるかめに厨と姥 松竹梅もそろうてあるししうげんもとゞころりのふすむしほんに婚礼 (これ) に増 悦ハないわへ

5. 崩し字学習教材としての検討

本稿の成果は大阪大谷大学教育学部における授業(「学校教育特論(言語)」)の中で得られたものである。本節では、この取り組みをふまえた大坂俄資料の崩し字学習教材としての検討を行う。

崩し字を読む場合、それぞれの仮名の字母と字形を記憶することが必須である。今回の受講生は、崩し字の初学者であったため、この記憶作業に加え、翻刻をより簡単にするために、AIくずし字認識アプリ「みを」を補助的に用いた。

「みを」はスマートフォン用のアプリであり、カメラで資料の写真を撮影し、解析にかけることで崩し字を現代の文字に直すことが可能である。しかし、その精度は必ずしも完璧ではない。但し、「みを」の特徴の紹介³⁾に「まず初学者、あるいは一般のくずし字が読めない日本人にとっては、文書にどんな文字が書いてあるかがわかるだけでも、内容が推測できるようになるという利点があります。」とあるように、初学者にとっては、有用な学習ツールである。また、「みを」のAIは「江戸時代の版本から集めたくずし字データを学習しているため、江戸時代の版本に対する精度が比較的高めとなりますが、他の時代の資料や、写本、古文書などでは、精度が低下する可能性があります。」とされている。初学者にとっては、「みを」を近世文献に用いることで崩し字学習が取り組みやすいものになると考えられる。

上記の「みを」の特徴から、近世末期の文献資料(大坂俄資料)を使用するに至っている。また、日本語学の資料としての検討、使用も視野に入れ、大坂俄資料の中でも未翻刻のものに取り組んだ。

結果としては、本授業の中で、学習者は、人文学オープンデータ共同利用センター「くずし字データベース検索(ひらがな(変体仮名)・カタカナ・漢字)」を併用しながら、無理なく翻刻作業が進められたようであった。下記の通りの感想が得られている。

・ 最初は、「みを」使って、必死に翻刻していた。しかし、徐々に慣れてくると、なんとなく分かるようになってスムーズに翻刻できるようになり、クイズ感覚で進めることができた。なんだかんだ言いつつ、崩し字が自然と読めるようになっていくことは面白かった。

・ 翻刻を進めていくうちに「みを」を使わなくてもスムーズに、どの文字か理解できるようになっていきました。それが自分の中で自信となり、気が付けば自分の担当する部分の翻刻が終わっていました。

・ 文字の読み取りが難しいときには、文脈を確認することがあるが、現在ではあまり馴染みのない言葉や表現が多く、判断が難しかった。

・ 「みを」のアプリを使うことで翻刻の作業が速くできるが、アプリは完璧に翻刻してくれるわけではないため、「くずし字データベース検索」などを使って自分でも確認しながら行う必要があると感じた。また文脈で判断することも重要だと分かった。

また、前述の通り、大坂俄は短い話が多く、翻刻作業の負担がしやすいものである。また、話のオチがあることから、翻刻から解釈までを学習者（もしくは学習グループ）が通して行うことができた。今後も他の大坂俄資料を用いて、日本語学の資料研究と崩し字学習の両側面を進めていきたい。また、大坂俄の種本資料は、未翻刻のものが多いとされている（荻田・宮田 1990）。翻刻作業

をすすめることで、資料性の検討や日本語史における資料の使用など、発展的な使用に繋げていきたい。

注

- 1) 武藤禎夫（1992）「解説」『諺臍の宿替』太平書屋。
- 2) 荻田清・宮田繁幸（1990）「幕末明治初期俄の種本紹介」『藝能懇話』(3) 大阪藝能懇話会 pp.70-116.
- 3) 人文学オープンデータ共同利用センター（2022）「みを（miwo）とは？」
<http://codh.rois.ac.jp/miwo/about/>（2023/1/17 閲覧）。

謝 辞

『ニ〇カの種』の翻刻許可をいただいた西尾市岩瀬文庫及び、翻刻に際して助言をいただいた名古屋大学大学院の坂上優太氏に深く感謝申し上げます。

（2023年3月1日 受理）